

活動報告書

報告者氏名：神田 雄樹

所属：秋田県立秋田きらり支援学校

記録日：平成27年2月27日

【対象生徒の情報】

○学年

高等部3年生

○障害名

肢体不自由

○障害と困難の程度

- ・頭部外傷による体幹機能障害、言語機能の喪失がある男子生徒。本校では「領域・教科を合わせた指導を主とする教育課程」の学習グループ。
- ・発声や発語は難しいが、伝えたいことがあるときは指差し、右指で○、両手の人差し指で×など、簡単なサインで意思表示できる。
- ・教師側からの問いに対しての受け身のなやりとりが多いため、本人の意図するところを引き出せていないことが多い。教師が類推した選択肢から選ぶ際に、質問の意味が分からなかったり、声にイメージがもてなかったりすると、困惑した様子が見られる。
- ・簡単な日常会話は理解でき、周囲の会話を聞いて楽しんだり、選択肢の中から選んで会話に参加したりできる。また、平仮名の読み取りをほぼできる。
- ・病院に入院しているため、夏季は週2、3回程度登校しているが、冬期は積雪のため通学することが難しく、週1回登校し、週1回教師が訪問する形で授業を行っている。

【活動進捗】

○当初のねらいと活動による方向性の確認状況

日常生活や学習場面において、自分の意思表示できる場を増やし、卒業後の生活を豊かにできるように支援していく。具体的には以下の2点について実践を行う。

- ①国語や自立活動の時間に「たすくコミュニケーション」や「絵カード」等のVOCAアプリケーションを使用し、操作方法の習得や表出言語の充実を図る。フリックやスワイプ等の操作が難しいため、少ないタッチで意思表示できるように、場面毎に使用できるシンボルを充実させていきたい。
- ②学校、保護者、病院で連絡帳代わりにSNSを使用していくことで、それぞれの場での様子を情報共有していき、伝えたい言語や必要な言語について整理していきたい。

○実施期間

平成26年6月1日（月）から平成27年2月13日（金）まで

○実施者

小西和晴、近江美歩

○実施者と対象生徒の関係

学級担任

【活動内容と対象児の変化】

○対象生徒の事前の状況

- ・2014年1月頃から家庭でAndroidのタブレット型端末を購入し、家庭だけではなく学校に持参して使用するようになった。VOCAアプリケーションの「たすくコミュニケーション」を使うのを面倒がり、指差しや簡単なサインで意思表示することが多い。
- ・運動会や学習発表会等の行事や事前学習のように、普段と異なる学習場面で困惑した様子が見られる。
- ・右手でスクリーンをタップしたり、スワイプしたり簡単な操作をできるが、自分でスマートフォンの電源を入れることが難しい。

○活動の具体的内容

タブレット型端末を使いたがらずに、指差しや簡単なサインで意思表示しようとする背景には、他者とコミュニケーションを図る上で有効なツールであるという経験が少ないためではないかと考えた。そこで、まずは簡単なやりとりの中で、自分の気持ちが「伝わる」喜びを体験できる場面を設定し「伝えたい」という気持ちを育てていきたい。そこから、自分の考えや気持ち具体的に「伝える」ためのツールとなるように活用していきたい。

①「伝わる」喜びを体験するための活用Ⅰ

- ・簡単なやりとりの中で「伝わる」喜びを体験することを目的に、お礼を伝える場面に限定して教師がスマートフォンを提示して使用した。使用するアプリは、カメラ機能と録音機能を使って簡単にシンボルを追加でき、シンボルをカテゴリ毎に分類できるため、場面や気持ちに応じて選択しやすいため「たすくコミュニケーション」を選定した。

②「伝わる」喜びを体験するための活用Ⅱ

- ・朝の会の進行（週1回1時間）を一人で行うことを目的に、会の次第に沿って進行する場面を設定した。使用するアプリは、カメラ機能と録音機能を使って簡単にシンボルを追加できること、指定した順番で表示できることから「絵カード」を選定した。
- ・自分でスマートフォンの電源を入れることが難しいため、車椅子の肘掛け部分にスマートフォンの写真を貼り、司会をする前にスマートフォンを使用したいことを周りの教師に伝えられるようにした。

③表現を広げるための活用

- ・言語理解の幅を広げ、表現の幅を広げることを目的に、国語の時間（週1回1時間）に「たすくコミュニケーション」を使用した。教師が物語を音読し、動作や気持ち、様子を表す言葉を中心に学習し、シンボルの中から選択できるようにした。また、生活単元学習では、感想を書いたり伝えたりする場面で活用した。

④やりたいことを選択し、伝えるための活用

- ・余暇の過ごし方を充実させることを目的に、昼休みに「たすくコミュニケーション」を使用した。「余暇」カテゴリの中に、本生徒のやりたいことをシンボルとして追加し、選択して伝えられるようにした。

○対象生徒の事後の変化

①について

- ・医療的ケアとして吸引や経管栄養を受けた後に看護師さんに「たすくコミュニケーション」で「ありがとう」と伝えられるようにした。画面にタッチしても反応せずに音声が出力できないことがあるが、出力できるまでタッチして相手に伝えようとする姿が見られるようになってきた。場面を限定してやりとりする場面を設定し、発信したことに対して反応が返ってきたことで、相手に「伝わる」喜びを実感でき、「伝えたい」という気持ちが育ってきている。（写真1）



写真1「医療的ケア」

②について

- これまで教師が代弁する形で朝の会の進行をしてきていたが、「絵カード」を使用したことで、自分の力で発信することができるようになった。さらに、発信したことで周りの友達がそれぞれの係としての役割を行ったことで、周りに「伝わる」ことを実感できた。
- 1学期は、教師がスマートフォンの電源を入れて生徒に提示し、すぐに司会をできるようにしていた。2学期から、スマートフォンの電源を入れずに机の上に置き、生徒の表出を待つようにしたことで、車椅子の肘掛け部分の写真を指差し、自分からスマートフォンを活用したいと教師に伝え、1人で司会をすることができた。これまで、教師からスマートフォンを渡されて活用する受け身的な活用の仕方だったが、生徒が自分から周りに発信したいという主体的な活用の仕方になるよききっかけとなった。(写真2)

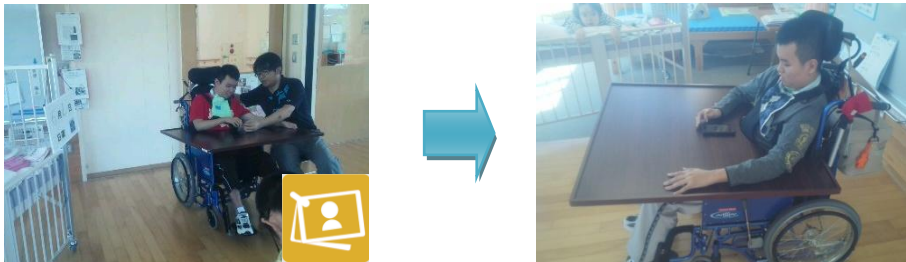


写真2「朝の会」

③について

- これまで物語の内容について答える際に、想定される答えを教師がホワイトボードに書き込み3つ程度の選択肢の中から選んでいた。「たすくコミュニケーション」を使用したことで、絵カード+音声という形で提示することができ、平仮名のシンボルではなく漢字のシンボルでも、「様子」(写真3)、「気持ち」(写真4)等のカテゴリの中からの的確な答えを選択することができた。音声がない場合は、不確実であったため音声があることで、以前学習したことと記憶が結びつきやすかったように感じる。また、シンボルの数が22から46に増え、国語の学習以外に普段の学習や生活の中でも般化できるように使用してきたことで、質問された事柄についての表現の幅は広がってきている。
- 2学期中頃からタブレット端末を机の上に置き、自分で必要に応じて使えるようにした。指差しでは伝えづらい事柄については、VOCAアプリケーションを使用して伝えることができた。



写真3「様子カテゴリ」

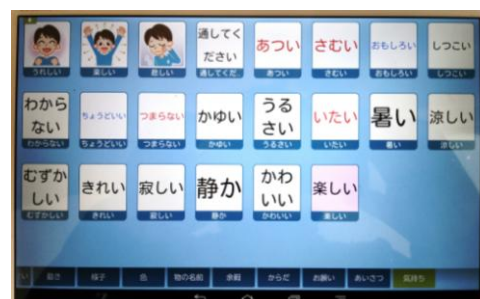
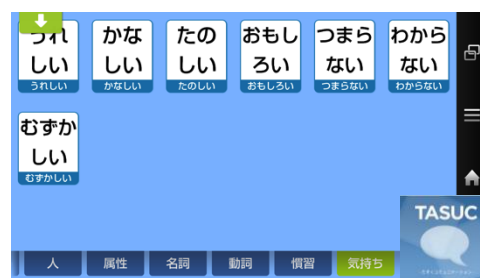


写真4「気持ちカテゴリ」

- ・「たすくコミュニケーション」での確かな表現が見つからないときは自分から「Sub Talker」(写真5)を選択して、50音表で伝えたい事柄を入力してより正確に伝えようとする姿が見られるようになった。卒業生との交流では、先輩に対する質問を考えて伝えたり、友達の質問に答えたりすることができた。文字入力する際に予測変換機能を利用することで、よく使う言葉や過去に変換・確定した文節を途中まで入力しただけで候補表示されるため、負担感なく使用することにつながった。

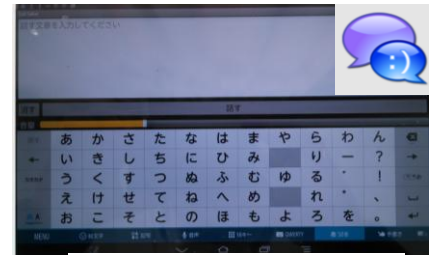


写真5 「Sub Talker」

④について

- ・これまで昼休みの余暇の過ごし方については、やりたいことを伝えるために具体物を指さして伝えたり、教師から聞かれて選択したりしていた。「たすくコミュニケーション」の余暇カテゴリ(写真6)に本生徒の好きな活動をシンボルとして追加し、選択して伝えられるようにしたことで、自分のやりたいことを確実に教師に伝えることができた。VOCAアプリケーションで自分から伝えられるようになったことで、自分でやりたいことを「選択」して、「できる」という経験が、学校以外の場でも伝えられるようになるのではないかと。



写真6 「余暇カテゴリ」

【報告者の気付きとエビデンス】

○主観的気付き

「気持ちが「伝わる」ことを実感できたことで、「伝えたい」気持ちの醸成に繋がったのではないかと

- ・指差しやサインでは伝えづらいことを、誰にでも正確に伝えることができるという経験を重ねることで、自分の気持ちを相手に「伝え」、相手の反応から「伝わる」ことを実感し、「伝えたい」という気持ちの醸成につながった。

「伝えたい」気持ちから、アプリケーションの自己選択・自己決定に繋がったのではないかと

- ・「伝えたい」という気持ちが醸成されたことで、自分の気持ちを正確に伝えようとする意欲が高まり、「たすくコミュニケーション」と「Sub Talker」の2つのアプリケーションから場面に応じて選択して伝えることができた。

○気付きに関するエビデンス

- ①年度当初はタブレット型端末を使いたがらず、指差しや簡単なサインで意思表示していたが、コミュニケーションを図る上で有効なツールであるという成功経験を重ねることで、画面にタッチしても音声が出力できないことがあったが、出力できないと諦めていた姿から出力できるまでタッチして相手に伝えようとする姿に変化した。
- ②教師からの問いかけについては「たすくコミュニケーション」を使用することが多いが、友達に質問するときは、細かい表現のできる「Sub Talker」を使用することが多い。場面に応じた選択と活用ができるようになってきている。

○その他エピソード

- ①国語の学習でイラストを見て、イラストの名称を箱に書き込む学習を行った。文字を書く際には50音表を手掛かりにしながら書いているが、「おに」のイラストを見て「おび」と書き込んでいた。そこで、「Sub Talker」を使用して「おび」と入力して音声出力することで、間違いに気付き自分で修正することができた。文字だけでは正しく読み取りや表出ができないことがあっても、文字+音声という形で確認することで正確な読み取りや表出につながった。
- ②学校、保護者、病院でそれぞれの場での様子を情報共有できるように「LINE」や「カメラ」を使用した。学校での学習場面や病院でのリハビリの様子を動画撮影しやりとりすることで、本生徒の支援や課題について共有することができた。本生徒は卒業後に病院でのリハビリを継続することと施設への通所を合わせ

て行うことが決まっている。3者での情報共有ツールとして簡単にやりとりすることができるため、卒業後もそれぞれの場所での生活場面に合った活用の仕方について共有していけるのではないかと考えている。

○今後の見通し

- ・これまで「たすくコミュニケーション」や「絵カード」等をコミュニケーションツールとして使用してきた。限定的な場面でのやりとりからやりとりする場面を少しずつ拡大したことで、自分の気持ちが伝わる喜びを実感し、正確に伝えようとする意欲が高まってきた。これらのアプリケーションはカテゴリ毎にシンボルを追加することが容易なため、学習場面に合わせたカテゴリやシンボルに広がりが見られた。しかし、使用したシンボルの使用頻度を正確に記録することが難しかったため、アプリケーションの基本機能として記録できればシンボルの使用頻度の変容を分析することで客観的なエビデンスとなるのではないかと感じた。実践を重ねる中で、初めは使用することを想定していなかった「Sub Talker」の50音表を自分から選択して、より正確に伝えようとする姿が見られたことに表現の幅の広がりだけでなく、伝えたいという気持ちの育ちを感じることができた。本生徒は、卒業後に病院でのリハビリを継続することと施設への通所を合わせて行うこととなる。それぞれの場所での生活場面を想像しながら、より具体的な活用の仕方を提案し、コミュニケーションの輪が広がっていくように連携を図っていきたい。

